

十 馬石、馬肝石

馬にまつわる石として、馬蹄石の外に馬石というのがあ

これは小豆島八十四番札所の海雲寺―そこにある石の名である。小豆島名所図
絵にも載っている。「寺の石段の下田圃の道傍に馬の背に似た大石がある。これ
を馬石と名づく」とあるからこれは、形の上から来た固有の石の名である。

大川郡の寒川町石田―その小倉山の田の中に御馬石というのがある。

この石田の御馬石には伝説があつて、昔、石田の地頭に国弘という者があつた。
国弘が小倉山に登っていると、山姥が路を塞いでしまった。やまうば力の強い国弘は怒
つて大石を投げつけると、山姥はたちまち姿を消してしまつたかと思うと、馬が
現われた。山姥が馬に化けたのである。

国弘は、その馬を捕えて、大力にまかせて、投げ棄てると、その馬が石に化け
てしまつた。それが小倉山の御馬石だ：

というもので、この話は、中山城山の全讃史に載っていて、御馬石は、「おんば石」という音に通ずるところから来たものであろうと、言われている。それで石田の御馬石は、馬の形を思わすような石ではない。

善通寺市の木徳―ここにも馬石というのがある。

ここのは、その形が馬の陽物になっている、つまり馬莖石という形である。

金倉川が流れる川岸の東側―このあたりは木徳といっても、与北新開との境辺で、すぐ傍には下涌出水というのがあって、その出水の横に立っている。

もう、かれこれ十七、八年前のことだ。私はこの異様な馬莖石を見つけ、思わず足をとめた。

陽物―性器崇拜にまつわる何か俗信の対象物か―などと一瞬疑って見た。

ちようど、すぐ近くに老農夫が畑仕事をしていたので、この石についてたずねて見た。

するとその老夫は、

「これは馬の塚石です。木徳の近藤家の下女が野で尻をからげて放尿していると、それを見つけた同家の馬が追かけて来た。馬は下女にほれていた見え、放尿中の下女に暴行を加えたので、その馬を殺してしまつたが、その馬の墓なのです……」
と、すらすらと、この石の由来を話して呉れた。

そく聞いて呉れたと、いわんばかりで、説明はなかなか上手であつた。

「自分はこの川の藪を、これまで開墾して、四反程の良田にした者じゃ、その開墾の途中に、藪の中からこの石が出て来た。これは近藤の馬塚石だということがわかつたので、この私が大切にこれを今の処に移したものだ……」

と、付け加えた。「あ、そうですか」何の事はない。たずねたその農夫がこの馬石の建てた当の本人だつたのだ。

金倉川の旧河道路と思われる礫の堆積丘の一部に薄い一枚の台石の上にこの老農夫が立てた、馬莖石―石質は細工し易い豊島石（角礫凝灰岩）―それを加工したものであつた。木徳の近藤家は昔の郷侍、帯刀の牢人株の旧家である。子孫は

転居してその頃は荒廃した屋敷跡だけが残っていた。

老農夫の馬石にまつわる咄は鮮かたで、少しも伝説や口碑めいたところがなかった。何と言う農夫か、私は―その時、老夫の名をたずねなかつたことが、今になつて惜しまれるのである。

もう一つ讃岐の馬石として文献に残っているものがある。

それは「輪池叢書十二」の馬石説で、その中に、次のような記事がある。

讃州綾の南条、福家の城主福家次郎左衛門藤原資基に一馬あり、この馬資基の先祖より相続して飼養する駿馬にて、綾鹿毛と名づく、そのよわい幾歳なるかを知らずといえども、本朝の「イケツギ」「スルスミ」の名馬にも劣らじの世に賞美せり。ある夜、資基、夢に彼の馬來りて告げていわく、吾腹中に、一玉蔵す、吾が寿命も且夕に迫る、それ故、腹中の一玉を君に捧ぐ、願わくは、君の子孫を長久ならしめんと…夢さめて後、果して馬は死し一玉を得、これを南綾の玉と号して蔵したが兵火に遇へども焼けず家、益々繁昌し、代々至宝として伝来するこ

と年久しく、福家四郎左衛門資満の代に至って、猶、武運長久のため、彼の玉を讃州香西の万徳寺へ奉納せしこと、その家の馬玉の記に詳なり……」

とあつて、この馬石は、馬の腹中から出たもので「馬玉」とか「馬肝石」とか「馬糞石」などといわれるもので、「譚海」には馬の糞として出るものでなく、体内に石となつたものだから、馬肝石というの説明している。「譚海」は幕末の医者が著したもので馬糞と共に出るものと考え易い馬糞石の名を還けている。

福家資基の綾鹿毛から出た馬石も、死馬を割いて出したと同家の馬玉の記にあるという。

その馬石、馬玉、馬肝石が、香西の万徳寺に奉納されているわけだ。

万徳寺は、真言宗の寺院で、文禄年中の建立その頃は法持坊と呼んでいた。

万徳寺の寺号は江戸の宝永年間いつけたものだから、この馬石の記にあるように、この万徳寺に今も蔵せられているのか、実は疑しい。その有無を私はたずねたこともない。

しかし、馬の体内から、馬肝石が時々出ることがあったと見え、

伊予の松山藩主、松平隠岐守定国（白川楽翁松平定信の兄）の馬が病死した。不思議な死因なので腹を立割って見ると臓腑の中から一尺廻りも固った石が、二つ三つ出た：：という咄もあるし、寛政九年三月、幕府の医官、多紀安元法師の宅で物産会が開かれているが、その会に桂川甫周が、「馬石」を二つ程、持参した記録があり、その時甫周はその一つを試みに割って見た。すると鉄錢一文が中から出てくる。もう一つを試すと、この方からは釘の折れたものがあつた。まことに少しの障りから物が固まって遂に石魂となるものだ！とその時参会していた服部玄広という人から聞いた話が、「随得抄録」に見えている。

十一 鈴石

手に握って振ると鈴のように鳴るので鈴石というのだが、その珍らしい石が三